

A J (A) A

入 学 考 査 問 題

国 語

聖 学 院 中 学 校

座席番号

考查番号

なまえ

◎問題用紙 七枚

◎解答用紙 一枚

一

次の①～⑩のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 自分をナツトクさせようとした。
- ② 口やかましい先生をケイエンする。
- ③ 答にチョツケツするヒントがあった。
- ④ ラクテン的な性格の持ち主。
- ⑤ コウキをのがさずピンチをしのいだ。
- ⑥ 製品の欠点をアラタめる。
- ⑦ 長い糸をタバねる。
- ⑧ ココロヨい返事をもらうことができた。
- ⑨ 自分の行いをカエリみる。
- ⑩ 武道の技をキワめる。

〔二〕 次の文章を読み、後の問に答えなさい。(、や。なども一字とします)

「ねえ、ちょっといい？」

なんだかクラスの女子がこそこそ話していると思ったら、その中の一人が集団から抜け出して、佐藤さんの前に立って言った。火曜日の放課後、うるさかった教室が、その異様な雰囲気(ふんいき)に一瞬(いつしゆん)で水を打ったように静まり返った。

「いいけど」

佐藤さんは突然(とつぜん)の出来事にも動じずに平然と言った。クラスの女子、仁科(にしな)さんの強い口調に怖(お)じ気づいた様子もない。①僕(ぼく)と志村は手を止めて成り行きを見守ることにした。

「話があるんだけど」

「何？」

「蛍子(けいこ)の香水(こうすい)がなくなったの。どこにあるか知らない？」

「知らないわ」

佐藤さんは仁科さんの目をまっすぐに見て言った。戸田さんはいつのまにか仁科さんの右斜(みな)め後ろに来てうつぶいしている。ちなみに、まあわかると思うけど戸田さんの下の名前は蛍子だ。僕は悪い予感がした。安土(あづち)さんが言っていたのはひよっとしてこのことだったのかもしれない。

「昨日の放課後なくなったらしいの。盗(と)ったの、あなたじゃないかなと思って」

「……どうしてそう思うの？」

佐藤さんは取り乱すこともなく静かに聞き返した。表情は硬(かた)かった。もしかしたら、怒(おこ)っているのかもしれないと思った。

「昨日、あなた最後まで教室に残っていたでしょ？ 蛍子は先生と面接して、かばんは教室に置きっぱなしだった。だから……」

「ちょっと待てよ」

②不意に、それまでずっと黙(だま)っていた志村が口をはさんだ。ちょっと待って。それは僕も同じ気持ちだった。週番で教室に残っていたのは佐藤さん一人じゃない。

「週番で佐伯(さへき)だつて残ってただろ。ずっと一緒(いっしょ)だったはずだ。昨日は部活だつてあったんだから疑(う)うことができる奴(やつ)は他にもたくさんいるはずだろ」

「でも」

志村が荒(あら)い口調で言うと、仁科さんは負けじと言り返した。

「蛍子が面接から帰ってきたとき、佐藤さんは教室に一人きりだったのよ。佐伯君は日誌でも置きに行ってたんでしょ？ 他にも疑える人はいるけど、でもいちばん怪(あや)しいのは佐藤さんよ！」

「怪しいからってこんなことしていいのかよ？ クラス全員の前で確証のないことで佐藤一人つるしあげてさ、これじゃまるでいじめだろ」

「でも盗みは犯罪よ！ それに私はただ話を聞いているだけ！」

「ただ話してるだけでこんな雰囲気になるかよ！」

僕は二人が言い争っている横にいたけれど、何も言えなかった。そしてそんな自分を恥(は)じた。僕は昨日の放課後、佐藤さんと一緒に週番の仕事をしていた。それなのに……それなのになぜ、僕は無実を証明できないのだろう。志村と一緒に佐藤さんの弁護(べんご)ができないのだろう。どうして――。

(……僕は意気地なしなんだろう)

本当なら真つ先に声をあげるべきだった。できなかったのは僕が情けないからに他ならない。②すごく歯がゆかった。昨

日、佐藤さんを一人にしてしまった僕と、今日、佐藤さんを弁護できない僕が、どうしようもなく。そのとき、誰かのすすり泣く声が聞こえた。顔を上げると、声の主は戸田さんだった。

「もういいよ亜紀ちゃん……盗まれちゃったらもう二度と戻ってこないもん。和君にもらった香水だったけど、でももういいよお……」

「よくないよ蛍子！ 大事なものなんですよ？ 頼んだら佐藤さんだつてわかってくれるよ」

「だから佐藤は！」

④志村がまた声を荒らげると、戸田さんはさらに激しく泣いた。僕はよっぽど大事な香水だったんだと思った。静まり返っていた教室は戸田さんが泣き出したことでざわざわしだした。

「……もういいよ、志村君」

なおも言い争う二人の横で、佐藤さんが言った。佐藤さんの表情からは何も読み取れなかった。能面のような顔。怒っているのではないのかもしれない、とふと思った。もしかしたら佐藤さんは、すごく傷ついているのかも。

「私も、うかつだった。かばんがあるところで一人きりになって、確かに疑われてもしょうがない」

「でも佐藤は盗ってないだろ」

「盗ってないけど、でも誰もそれを証明できないでしょ」

⑤佐藤さんの冷静さに押されたのか、志村は何も言わなくなった。佐藤さんは二人に向き直って言った。

「信じてもらえないかもしれないけど、でも私は盗ってないわ」

「その証拠は？」

「ないわよ」

「じゃあ」

「盗ったっていう証拠もないでしょう」

仁科さんは言葉を詰まらせた。佐藤さんは落ち着いていた。冷静すぎるほど冷静だった。

③……こんなこと言い合つてたつて埒があかないわ。帰ろう、蛍子」

仁科さんのほうから絡んできたのにもかかわらず、言うだけ言って仁科さんはさっさと背を向けた。戸田さんの肩を抱いてうながす。戸田さんは最後に振り返ってなおも泣きながら言った。

「蛍子、返してくれたらもう怒らないから。待つてるから。いつでもいいからね」

二人は他の女子数人を引き連れて教室を出ていった。僕はどっちもかわいそうだと思いつつながらうなだれた背中をぼんやりと眺めた。大切な香水を盗まれてしまった戸田さんと、クラス全員の前で窃盗の疑いをかけられた佐藤さん。なんだか板ばさみだ。

ざわざわしていたが、凍りついたように誰も動かなかったクラスの連中は、戸田さんたちが教室を出ていったとたんに動き出した。でも波が寄せては返すようなざわざわとした会話はやまない。明らかに佐藤さんに視線が集まっている。みんな、佐藤さんを疑っているのかもしれない。佐藤さんはそんなざわめきを振りはらうように席を立った。

「……チョーク、事務室に取りに行ってくるね」

「あ、うん」

「佐藤」

「大丈夫よ」

呼び止めた志村に、佐藤さんは無表情のままですう言つて、教室を出ていった。ざわめきは大きくなったけれど、もうそ

んなの気にならなかつた。佐藤さんが心配だつた。今、何を思つて、どんな気持ちでいるのか。話してほしいと思つた。
「面倒なめんどうことになつたな」
「そうだね」

㊦志村が横でため息をつきながら椅子いすにすわつた。僕は心の底から同意した。

(片川優子 『佐藤さん』)

問一——②について、「僕」はどのような心境しんきやうになっていますか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、真相を知っている僕は、本当のことを言いたくてソワソワしている。

イ、言い争っている二人の横にいる僕は、どうなるかハラハラしている。

ウ、思うようにできない僕は、頼りない自分に対してイライラしている。

エ、佐藤さんの無実を信じたい僕は、事の成り行きにドキドキしている。

問二——③について、「仁科さん」はどのような心境しんきやうになっていますか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、否を認めない佐藤さんに腹を立てた仁科さんは、怒りいかでことばが出せなかつた。

イ、蛭子きづかを氣遣つた仁科さんは、次の機会に佐藤さんにわかってもらおうと考へた。

ウ、佐藤さんを言い負かした仁科さんは、これ以上言つたらかわいそうだと判断した。

エ、佐藤さんに正論を言われた仁科さんは、言い返すことばが見つからなかつた。

問三 「志村」の説明としてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、……⑦では、腹にすえかねた志村が佐藤さんの肩を持つとうとしている。

イ、……⑧では、つむじを曲げてしまった志村が横やりを入れている。

ウ、……⑨では、うだつが上がない志村がほぞをかんでいる。

エ、……⑩では、一矢を報いた志村がうわの空のようになっている。

問四 この文章ではクラスの様子をどのように表現していますか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、事態の進展を見守るクラスの様子を例えて表現している。

イ、蛭子きづこに同情するクラスの様子を僕の視点を通して表現している。

ウ、佐藤さんを非難するクラスの様子を緊迫感きんぱくのあることばで表現している。

エ、先の見えない状況を見定めるクラスの様子を回想を交えて表現している。

問五 僕は戸田さんと佐藤さんの二人をどのように感じていますか。それが行動で表れている一文のはじめの五字をぬき出しなさい。

問六——①以降、僕の佐藤さんに対する見方は、佐藤さんの何を見て、どのように変わっていきましか。二十字程度の三つの文でまとめなさい。

三 次の文章を読み、後の問に答えなさい。()、や。なども一字とします)

魚は意外なほどよく自分のなわばりの地理を記憶しているように見える。そして、自分のなわばりでない場所では、攻撃を受けたら一目散に退却してしまう心理状態にあるらしい。逆に、自分のなわばりの中にいるときは、死んでもここはあけ渡さないぞという決意にみなぎっている。

このような心理状態が、なわばりに対する所有欲、巣の中の家族に対する責任感、あるいは「愛情」とほとんど無関係なことは明らかである。それは動物がみなもっている攻撃の衝動と逃避の衝動とのバランスが、一定の場地的感覚とむすびついてどちらかに傾くだけのことにすぎない。しかし、自然状態においては、①このほとんど純生理学的な行動が、たいへん高貴な愛情に基づく教育ママの行動より、子を育てる上ではるかに良い結果を生むこともたしかである。

こうしてみると、なわばり所有者の同種他個体に対する攻撃は、それほど悪ではないことになる。この攻撃がないと、みんなが巣のまわりまでやってきて、巣や子の安全をおびやかすだろうし、営巣に適した巣穴も、いつまでも持ち主が確定せず、生殖は不可能になるかもしれない。さらになわばりの先住効果のおかげで、ひとたびなわばりとメスを得た個体は、その後は同種のいかなる他個体の侵入も退けて、十分に自分の子を育てる可能性が与えられる。なわばり制というシステムは、ひとつの個体ないしひとつの家族を守る、②動物としては「人道的」、「文化的」な社会制度といえそうである。そうなるのと、なわばり制の基盤をなす個体間の攻撃も、あまり罪悪視はできない。

さらにすばらしいことには、なわばりに関する闘いは、殺しあいにもで発展することが稀れである。

前にも述べたように、「他人の」なわばりに入りこんでいるな、と感じた個体(むしろ、ここは自分のなわばりではないなと感じている個体)は、あえて擬人化すればそのやましさにゆえに、なわばり所有者から攻撃されるとすぐ引き退ってしまう。そこではけっして組んずほぐれつの闘いなどおこらない。だが問題はこれですむほど単純ではない。なわばりの所有者は引き退ってゆく侵入者を追いかけてゆく。しかし深追いは動物においても危険である。なぜなら、③追跡がすすむ間に、両者の心理状態が刻々と変化してしまうからだ。

動物の「闘志」は、なわばりの中心すなわち巣からの距離に反比例する。なわばりの境界近くまで侵入者を追いかけていった所有者には、もはや攻撃のはじめほどの闘志はわいてこない。闘志と同じくらい逃避の衝動が強くなっているのである。

この比例関係は、じぶんのなわばりに逃げこんだ動物についてもあてはまる。そこでこちらのほうは、じぶんの巣に近づくにつれて、闘志がみなぎってくるのである。

深追いしすぎて相手のなわばりに侵入した追跡者は、相手のがぜん反攻に転じると急いで後退してじぶんのなわばりへ逃げこむ。もし相手がそこまで深追いしてくると、事情が逆転する。こうしてしばしば一對の動物は、ふりこのようにふれながら、ついになわばりの境界線でとまることがある。

さてそうなることとはかたんににはかたづかない。どちらの個体でも闘争と逃避の衝動が相克している。動物は攻撃にもうつれず、さればといて逃げだすこともできない。そのような状態になると、どちらか一方の動物は、ふいにとんでもない行動型をあらわす。にらみあいのまっ最中に、いきなり眠りこんだり、草をひきぬいたり、トゲウオだといきなり川底の砂にかみついて、巣をつくるような行動をするのである。(4) ()、たいていの場合、相手は逃げさってしまう。

このような珍妙な行動は、一般に「転位行動」とよばれている。転位行動は、攻撃と逃避の衝動が相克してどうにもならなくなったとき、本来ならまったくべつの場合にあらわれるべき行動型が、転位してあらわれたものと考えられている。それは本来の睡眠時間や、草ひきや造巣のときの行動にたいへんよく似ているが、そっくりそのままというわけではなく、い

くつかの点が不自然に強調されている。(⑤) (鳥の転位睡眠の際、首は眠るときのように後方へ曲げられ、くちばしは羽がいの間につつまれているのに、眼は開いていて、ギョロギョロ相手を見つめている。闘争のさい、どのような行動型が転位行動としてあらわれるかは、けつしてでたらめではなく、種によってきちんときままっている。なぜそうなるのか、その生理的しくみはまったくわかっていないけれど、社会的に重要なことは、このような転位行動がその相手に対して、強力な威嚇効果をもつということである。争っていた動物は、相手がこの行動型をあらわすと、ついに闘いをやめて引き下がってしまうのだ。なぜそんな効果があるのか、これも現在のところまるきりわからない。

いずれにせよ、このように種々の生理的現象の組み合わせが、彼らに攻撃しあうが殺しあうことはすくない社会を持つことを可能にした。

さらにすばらしいことには、動物もある意味での道徳をもっている。この「モラルに似た行動様式」は、ローレンツの発見したものであり、彼の著書にくわしく述べられているが、要するに牙とかくちばしとかいう強力な武器の発達した動物では、なわばりその他をめぐる闘争の際、負けた相手が一定の姿勢をとると、もはやそれ以上の攻撃ができなくなるような心理的機構が遺伝的にそなわっているのである。

ローレンツのあげている例にしたがえば、たとえばオオカミでは、負けたオオカミが首をたれて、その急所である首筋を勝者の牙の前にさしだすと、勝ちほこったオオカミはもはやそれ以上の攻撃ができなくなる。彼は相手の首筋にガブリとかみつきたくてたまらないのだが、それができないのである。これは理念やあわれみや時代に左右される道徳ではなくて、遺伝的にそなわった、純粹に心理的な抑制である。叱られた女の子がまったく無防備でさめざめと泣きだすとき、怒りの感情が消えたわけではないのに、もうそれ以上叱れないのと、ある程度共通した現象といえる。

このような心理的機構にもとづく社会的抑制は、オオカミやイヌをはじめとして、牙そのほか強力な武器をもつ多くの動物にみられる。それによって、彼らは、もしその気になれば一撃で闘争の相手を殺せるほど武装されているにもかかわらず、ほとんど殺しあうことがないのである。これは実に驚くべきことではないだろうか？

そして⑥そのような攻撃抑制の機構は、種の進化の歴史の中で獲得された遺伝的なものである。負けたときどのような服従の姿勢をとるか、またどのような姿勢をとられたら攻撃行動が抑制されるかは、種によってじつにさまざまで、オオカミやイヌは今述べたように首筋をさしだし、シチメンチョウは地上に長々と伏せる。しかし、いずれにせよ、それは種によって明確にきまっている。動物はそれ以外の方法で降伏の意を表明することはできない。人間だって局地戦争で山中に追いつめられ、ついに投降しようというときには、赤いシャツで代用したりせず、サルマタをぬいでも白い布を掲げる。ただこの降伏の意志表示が、動物の場合ほどの確に彼らの命を救うかどうかは、保証のかぎりでない。⑦人間は不幸なことに、動物で今述べたものに相当する遺伝的な抑制機構をほとんどもっていないからである。

(日高敏隆 『動物にとって社会とはなにか』)

*「営巢」………巢を作ること。「造巢」も同じ意味。

*「擬人化」………人のようにたとえること。

*「反比例」………二つの変数の一方が二倍、三倍となる時に、他方が二分の一、三分の一と変化していくこと。

*「相克」………対立するものが互いに相手に勝とうと争うこと。

*「威嚇効果」………暴力などを使って相手を従わせようとする効果。

*「ローレンツ」………オーストリアの動物学者(一九〇三〜一九八九)。動物の、種に固有な行動型のメカニズムを研究した。

問一——①はどのようなことですか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、人間の母親が自分の子供に愛情を注いで教育するよりも、動物の本能による子育ての方がうまくいくということ。

イ、使命感で子供に愛情を注ぐよりも、自分が思った通りに子育てをした方が子供は順調に伸びていくということ。

ウ、子供を手放すのを恐れる人間の母親よりも、心理と場所を重視した動物の子育ての方が大きく育つということ。

エ、理想のために教育する人間の母親よりも、自然に備わった衝動による動物の子育ての方がうまくいくということ。

問二——②はどのようなことですか。もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、人間には及ばないものの、動物の中でなわばりを持っている個体は、それ以外の個体とくらべて、成熟した営巣環境を持っているということ。

イ、動物はなわばりを持つことで、それぞれの個体が外敵の攻撃から守られて成長していく仕組みが、ある程度保証されているということ。

ウ、個体間の攻撃によって、動物は子育ての工夫を覚え、より安全な場所を探し出すきっかけを得ることができるということ。

エ、動物は他の個体のなわばりに侵入しないことで、周囲の危険から逃れ、同時に安定した子育ての環境も得られるということ。

問三——③について、「両者の心理」はどのように変化しますか。それぞれ二十字程度で説明しなさい。

問四 (④) と (⑤) に入ることばの組み合わせとしてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア、④… だから ⑤… そして

イ、④… なぜなら ⑤… したがって

ウ、④… すると ⑤… たとえば

エ、④… しかし ⑤… また

問五——⑥はどのようなものですか。具体的に説明している一文をぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問六——⑦とありますが、人間は何によって行動を抑制していると考えられますか。二十字以内でぬき出しなさい。

問七 動物同士は攻撃しあうことがあっても殺しあうことが少ないのはなぜですか。四十字程度で説明しなさい。

問八 本文を三つのまとまりに分ける場合、どこで区切るのがふさわしいですか。次の組み合わせから選びなさい。

ア、 魚は意外なほど | さて、そうなる | さらにすばらしいことには

イ、 魚は意外なほど | このような珍妙な行動は | そしてそのような

ウ、 魚は意外なほど | 動物の「闘争」は | このような心理的機構に

エ、 魚は意外なほど | この比例関係は | いずれにせよ

